

住んでいる地域

村上市立朝日中学校 3年 長谷部 希光

私の住んでいる地域は、自然の豊かな田舎です。周りには青々とした山が連なり、大きな森があり、どこまでも田園風景が続いています。澄んだ川では魚が踊り、楽しそうな鳥の声が聞こえてきます。自然と人が共存している。そのような地域です。私は、この地域の中で散歩をすることが好きです。豊かな自然の中で散歩をしていると、次第に心が落ち着いていきます。澄んだ空気や鮮やかな緑は、私の心を包み込んでくれます。

しかし、最近気になっていることがあります。それは、田畑や山林の中によくゴミが捨てられていることです。散歩をしていると、お酒の缶やタバコの吸い殻などをしばしば見かけることがあります。自然の中にゴミがあると、どうしても綺麗な景観が崩れてしまいます。ゴミのことで、私には印象に残っている話があります。

私は小学生の時に、毎日徒歩で通学をしていました。周りは田んぼに囲まれていて車もほとんど通らない道を、晴れの日も雨の日も曇りの日も、ボランティアの方と一緒に毎朝歩いていました。ボランティアの方は子ども想いで優しく、通学班の子どもたちから親しまれていました。ある朝のことでした。いつものようにみんなで学校へ向かう道を歩いていると、田んぼの脇に空になったお酒の缶が落ちていました。私は、誰が捨てていったのだろうと思いながら、その缶の横を通り過ぎ、何事もなく歩きました。そのとき、私より少し後ろを歩いていたボランティアの方が、捨てられていた缶を当たり前かのように拾いました。それからボランティアの方は、毎日毎日、道に落ちているゴミを拾っていました。

「そうか、ゴミが落ちていたら拾えばいいのか」

と、私はその時気づきました。私がおもってなかった、ゴミを拾う勇気を、その方はもっていたのです。それから、ゴミが落ちていたら見て見ぬふりをするのではなく、自分で拾おうという考えをもつようになりました。自分がゴミを拾うことで、道端に捨てられるゴミを減らせると思ったのです。

今でも私は、散歩の途中でゴミを見つけると、あの時のボランティアの方の姿を思い出し、できる限り自分で拾うようにしています。しかし、いくら拾っても、次の週にはまた新しいゴミが落ちています。

本当に、誰か一人の力で、ゴミのポイ捨てをなくすことができるのでしょうか。

確かに自分がゴミを拾うことで、落ちているゴミの量は減らせると思います。ですが、またゴミを捨てる人がいれば、拾っても拾ってもゴミのポイ捨てはなくなりません。では、なぜ道端にお酒の缶やタバコ、ペットボトルなどを捨ててしまうのでしょうか。それは、自分一人くらい、悪いことをしても大丈夫だろうという気持ちがあるからではないのでしょうか。自分がゴミをポイ捨てしても、誰かが拾ってくれるから大丈夫だという気持ちがあるから

ではないでしょうか。そういう気持ちは、私の中にもありました。ゴミのポイ捨てに気付いてはいるものの、誰かが拾ってくれるだろうと思って行動に移すことができませんでした。その気持ちはゴミのポイ捨てだけでなく、他のことにも当てはまるはずです。例えば、少子高齢化のことです。私の地域は少子高齢化が激しく、年々人口が減ってきています。そのことに気づいてはいるものの、大人になるにつれ、他の地区へ移住する人が多いです。これも、自分の地域は少子高齢化が進んでいるとわかってはいるものの、自分の地域に関心がなくなっているということではないでしょうか。

地域をより豊かに、住みやすくするためには、一人一人が住んでいる地域について「関心」をもつことが大切です。誰かに任せきりになるのではなく、一人一人が考えて行動することが、次の世代に地域をつなぐ第一歩になるのではないのでしょうか。

それは決して、何か大きな社会運動を始めなければならないということではありません。「目の前に落ちているゴミを一つ拾う」「地域の行事に少しだけ顔を出してみる」「地域の良さを誰かに話してみる」といった、日々の小さな当事者意識の積み重ねこそが、未来の地域や伝統を支える大きな力になるのだと私は信じています。